



Title	タイの高齢化事情
Author(s)	佐藤, 真一
Citation	生老病死の行動科学. 2016, 20, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/57140">https://hdl.handle.net/11094/57140</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 卷頭言

### タイの高齢化事情

Aging in Thailand

佐藤眞一

2015年10月19日～22日にタイ王国チェンマイにて開催された第10回アジア・オセアニア老年学会(IAGG Asia/Oceania 2015)に、大学院生や卒業生と共に出席してきました。当初はバンコク開催が予定されていたのですが、軍事政権が続くタイでは2013年後半から14年にかけて反政府デモが頻発したため、北部の古都チェンマイでの開催に変更されました。その後、デモは収まっていたのですが、今度は学会開催の1か月前の8月17日にバンコクの繁華街で爆破テロ事件が起きました。死者20人、負傷者125人（日本人1人を含む）という痛ましい事件でした。そのためタイで開催される本学会への参加に関して、本学事務部門から安全確認をせよとの連絡が入りました。バンコクは飛行機を乗り換えるだけの予定でしたので、「安全」と判断されて予定通りに出席し、無事に帰国することができました。

タイへはそれほどの危険を感じずに行くことのできた私たちも、帰国後の11月13日に発生したパリ同時多発テロ事件の報道に繰り返し接していると、海外出張への恐怖をリアルに感じるようになりました。私の専攻する老年学や心理学に関する国際学会は、毎年ヨーロッパや北米を中心にいくつも開催されます。これまでの研究者生活で二十数カ国を訪れましたし、最近では毎年2～3回は国際学会等に出席するために海外出張をしています。しかし、パリでの事件をニュースで見聞きしてからは、海外で開催される学会への参加は慎重にならざるを得ないと思うようになりました。共同研究者の大学院生を引率することも多いので、なおさらです。今後の国際学会参加に当たっては、開催地の政治事情や歴史的背景などをチェックして、自ら危険度を判断することの必要性を身に染みて感じています。

さて、チェンマイでの学会ですが、いくつかのシンポジウムを聞いているうちに、タイを含む東南アジアの老年学の課題は日本とはずいぶん違う、ということを実感することがたびたびありました。代表的な内容としては、タイやその周辺国では、認知症はまだ国民の関心事ではないし、さほど問題になっていないということでした。

今回、私は2つの研究発表に関与していました。1つが認知症、そしてもう1つが看取りに関するものです。どちらも、近年、私が強い関心を抱いて研究している内容です。日本で認知症が国民的な関心事になっていることは、毎日のようにテレビや新聞で様々な形で取り上げられたり、ニュースになったりすることからもわかります。認知症予防のためのトレーニング方法、認知症予防に有効な食材、認知症予防のための自治体の取り組み等のテレビ番組は、放送局を替え、繰り返し頻繁に放送されています。そして最近では、認知症の人自ら

の発言を取り上げた番組が話題になりました。また、認知症の人の家族介護者による心中や殺人事件、プロ介護士による暴力や虐待、認知症高齢者による交通事故など、悲しいニュースもしばしば報道されています。一方で、タイでは認知症はほとんど問題になっていないという研究発表を聴いていて、改めて社会の長寿化の一般的なプロセスを思い浮かべていました。

タイでは、国民の最大の健康問題は脳卒中（脳血管障害）とのことです。少し前までは、いかにして栄養を確保し、生き延びるかが課題だったとのことですが、日本と同様に米を主食とするタイは、現在、脳卒中多発国となっています。この事実を報告するタイ人研究者の発表を聴いていて、戦前・戦後の日本人の不衛生、低栄養の時代から、その後の脳卒中多発の時代を振り返っているような気がしていたのです。その研究者は、今後はタイ国民への栄養指導を通じた脳卒中の一次予防を中心とする健康教育が重要な政策課題になると言っていました。現在は、脳卒中に対応する薬剤が飛躍的な進歩を遂げているため、栄養指導や救急医療の発展と相俟って、タイの脳卒中は激減していくことでしょう。すると日本人が辿った以上の猛スピードで長寿化が進展して行くことになるかもしれません。タイ国民の長寿化は、政治の民主化および経済発展といかなる関係を持ちながら実現するのかと、強い興味を持ちました。長寿化が実現すれば次に起きる健康課題は、生活習慣病と癌、そして認知症です。心理学研究者としては、これらがどのような形でタイ国民の話題として取り上げられ、彼らがどのような行動をとるようになるのかについても興味深いところです。

我が国は、高齢者人口に占める認知症高齢者の割合が世界で最も多い国です。そして、特に介護保険法施行以後は、介護実践に関わる社会実験やアクション・リサーチによる研究成果が積み重ねられてきています。また、アルツハイマー病薬の研究やロボットなどの老年工学分野も世界の最先端を走っています。我が国の研究者たちのこうした努力は、これから長寿社会が実現し、認知症ケアが現実の課題となってくるタイのような国々に暮らす人々に対しても大きな貢献をすることになるでしょう。そのようなことも考えながら、研究室の学生たちと共に研究を進めて行きたいと思っています。

---

「生老病死の行動科学」第20巻をお届けします。インターネット上の公開もしていますので、そちらもご覧いただければ幸いです。

大阪大学学術情報庫(OUKA) <http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

また、当研究室のホームページからもご覧いただけます。

臨床死生物学・老年行動学研究室 <http://rinro.hus.osaka-u.ac.jp/>